狐と死人の少女

佳春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狐と死人の少女

【Ｎコード】
Ｎ３４２６Ｙ

【作者名】
佳春

【あらすじ】
何千年も生きている狐と暗い過去を持つ女子高生。
すべては少女が古い雑貨屋に入ったことから始まる。
二人が出会い、止まっていた雑貨屋の時間が動きだす。

序の章

「はあ・・・今日もお客がこないなぁ」
長髪で和服を着ている男が店と部屋を仕切る段差に腰掛けて、溜め息をつく。
「一番最後にお客が来たのはいつだったか・・・。確か、六十・・・・いや、七十年前か？」
男はふむとあごに手を当て、店の暖簾をくぐった。
「今思えば、この町も昔と随分変わったな」
店先で腕を組みながら、周りを見る。
昔は低い建物ばかりだったのに、今は高い建物が多くなった。
この一帯で変わらない建物は男の店とその店の隣の古本屋、そして向かいの呉服屋のみだ。
それ以外はすべて作り替えられてしまった。
「・・・昔はそれなりにお客が入っていたんだがなぁ。まあ、昔に比べれば数段明るくなったんだから仕方がないか」
男はそう呟くと店の中に戻っていった。
店の中を見てみると、ところどころ埃が溜まっている。
「面倒だな」
そう言って、店の奥に男は引っ込む。男は部屋の中で煙管をふかしていた。
男は掃除する気はないらしい。
畳の上に正座をして、動かない。積極的にお客をとるつもりもないらしい。
男はただお客が来るのを待つだけ。
「さて、次に来るお客はどんな人間かな。あと何年後に来るかはわからんが」
男は口角をあげて、にやりと笑った。

出会い

「・・・」
少女はとぼとぼと俯きながら歩いている。
彼女の表情は暗く沈んでいる。
前から見れば、その表情はわからないのだが、彼女の纏う雰囲気で容易に察することができる。
「・・・」
少女は人気のない橋を渡りはじめた。
だが、橋の真ん中あたりで彼女は止まった。
そして、橋の下を覗き込んだ。
川は昨日の雨で茶色く、流れが早い。
「・・・・・・・・・・・・・・かな」
少女は何かを呟いた。しかし、あまりに小さな声だったので聞き取ることはできない。
彼女は橋の欄干に手をかけ、体を乗り出す。
少しでも背中を押されれば、川に真っ逆さまだ。
それを考えたであろう少女は、欄干から離れた。
「また・・・・・・死ねなかった」
少女はまたとぼとぼと歩きだした。
とぼとぼと沈んだ雰囲気を纏って歩いている少女の姿を見れば、誰もが何かがあったのだろうと容易に想像できる。
少女の制服は所々破け、汚れている。そして、少女の体には傷が多く刻まれていた。
今が夜でなければ、警察に呼び止められていただろう。
彼女は人気のない道を歩く。
街灯もなく、店は閉まっている。ふと視線を上げてみると、一軒だけ明かりが灯っていた。
引き寄せられるように少女は近づいていく。

周りに比べたらとても古い建物だった。
その店の隣にも古い建物はあるが、この店に比べたらまだ新しく思える。
時代で言えば、目の前の店は江戸時代に作られ、その隣の店は昭和に作られたような差があった。
少女は店の中を覗き込んだ。
「入っておいで」
突然店の中から声をかけられ、少女はビクッとする。
少女が声のしたほうを見ると、長髪で二十代半ばだと思われる着物を着た男性が微笑んでいた。
少女はじりっと後退りし、走り去ろうとした。
「行ってしまうのかい？　残念だなあ」
男が心底残念そうにうつむく。
それにちくりと罪悪感を感じた少女は荷物で姿を隠しながら、入り口で男に小さく、
「あの・・・今は入れるような姿じゃないので、明日でもいいですか？」
と聞いた。
すると、男は顔を上げ、
「ごめんね。明日には店仕舞いにしようかと思ってるんだ。明日じゃ、もういないかもしれないんだ」
と、言いながら男は少女に近づいてくる。
「だから・・・今日にしてくれるかな？　それに姿なんて、こうしちゃえばわからないし」
そう言いながら、男は少女にふわりと自分の着ていた羽織をかけた。
驚いたように少女が男を見る。
「ね？　さあ、自由に見ていっていいよ。うちは何でもあるから」
男は少女の背を店の中へと押す。少女は促されるまま、店の中へと足を進める。
男は少女を店の中に入れると、店の奥の部屋で煙管をふかしはじめ

た。それを横目でちらりと見たあと、羽織を握って体を隠すようにしながら、店の中を見て回る。
その姿を男が少し口角を上げて見ているとも知らずに。

「あの・・・」
少女がおずおずと尋ねる
「何かお探しで？」
男は煙管を置いて、少女に近づく。
少女は数歩後退さった。
男は部屋と店の間の段差に腰掛けた。
「それで、何をお探しで？」
「ロープ・・・というか、縄というか・・・」
「縄ですね。何に使うんです？」
「・・・」
「まさか、自殺、とかではないですよね。すみません、冗談です」
男がおどけたように笑う。
「・・・」
少女は無言で視線をそらす。
「・・・冗談ですよね？」
男が気まずそうに聞く。
「・・・」
「・・・・・・・・・やっぱりそういう客だったか」
男が顔を手で覆う。
「？」
少女は困惑したように、男を見る。
「ふう・・・」
男は段差から立ち上がると、少女の前に立つ。
「私の名前は御子神と言います。この店はいわくつきで、この店に来るのはなにかしらある人ばかりです」
「・・・なにかしら？」

「ええ。例えば、重い過去を抱えていたり、犯罪者だったり、人間でなかったり・・・」
御子神は思い出すように答える。
「に、人間でなかったり・・・？」
「そうです。妖怪というのは信じますか？」
「妖怪？」
「ええ。かくいう私も妖怪なのですけど」
御子神は怪しい笑みを浮かべる。
「！」
少女はまた数歩さがった。
「ああ、恐がらないで。私はあなたに害なすつもりはありませんから。でも、なんとなくあなたのことはわかりました」
「どういう・・・」
「あなたは暗く重い過去をお持ちですね？」
「！」
少女は体を隠すように、羽織を握る手を強める。
「な、なんのことですか？」
動揺したように聞き返す。
「図星ですね」
その言葉に少女はうつむく。
御子神は溜め息をついた。
「死にたいのでしょう？　だったら、取引をしませんか？」
御子神が急にそんなことを言ってきた。
それに、少女は目をぱちくりさせる。
「取引？」
「はい。そのいらない命、私にくれませんか？」

取引

いらない命、と少女は呟いた。
「取引の条件はあなたにとって有利にしたい。だから、今まであったことをすべて話してください。きっと、すっきりしますよ。当然、口外は一切しません。約束します」
御子神は真っすぐ少女を見て言う。
少女と御子神は数瞬の間、見合った。
そして、少女はぽつぽつと話し始めた。
御子神は真剣に聞いていた。

話し終え、少女はうつむく。
「・・・そうですか。そんなことが。・・・大丈夫ですか？」
御子神は心配そうに少女に尋ねる。
「大丈夫・・・ではないかもしれません」
少女が少し辛そうな笑みを向ける。
御子神は苦しそうな顔をする。
「・・・思い出したくもないことを、話させてごめんなさい」
御子神が少女に頭を下げる。
「いえ、そんな・・・話せて良かったです。こんなこと親に話せなくて・・・」
「一人で抱えてたんですね。・・・もう大丈夫ですよ。そんな奴らもういませんから」
御子神が少女に笑いかける。
少女もつられるように笑った。
「笑った」
嬉しそうに御子神が満面の笑みを少女に向ける。
「ふふ。なんだか、あなたといると安心するし、何でも話せる気が

します」
少女が少し照れながら言う。
「そうですか？」
少女は笑いながらうなずく。
「よし。じゃあ取引をしよう」
「はい」
「まず、こちらが先に取引条件を述べます。何か不満があったら言ってください」
「わかりました」
少女の返答に御子神がうなずく。
「一、あなたの魂を買い取る。
一、あなたに有利な条件・環境を提示する。
一、あなたの魂を買い取ったのち、私の下で働く。
これだけです」
御子神が条件を言うたびに指を立てる。
「なにかありますか？」
「あの、具体的にどうやって魂を買い取るんですか？」
少女が挙手して聞く。
「知りたいですか？」
少女はこくりとうなずく。
「・・・。あなたを、殺します」
御子神が少し声を潜めて言う。
「そして、魂を別の器に移し、終わりです」
「殺す・・・？」
「はい。生きているまま魂を取り出すと、人間的に面倒なことになりますから」
「面倒なことと言うと？」
「魂のない肉体は、植物状態いわば廃人になります。魂はなくとも肉体は生きようとしますから」
御子神は淡々と答える。

「それに、これはあなたにとっていい条件だと思います」
「え？」
「あなたは自分の体は汚れていると思っているでしょう？　あんなことがあったんです。当然でしょうが」
「・・・」
少女はうつむく。
「なので、肉体を過去を存在を捨て、新しい自分として生きるのはどうでしょう？　器は選べますし」
御子神が微笑む。
「・・・じゃあ、その条件でお願いします」
少女が頭を下げる。
「取引成立ですね」
御子神はそう言って、少女に手を差し出す。
その差し出された手を少女はつかんだ。
「ちなみにどうやって殺すんですか？」
少女は少し首を傾げる。
「事故死を装うかと思います。殺人は人間的にいろいろ面倒ですから。あ、自殺も同じですからね。ご家族に迷惑をかけたくはないでしょう？」
少女はうなずく。
「ただ、殺すときちょっと苦しいかもしれません」
御子神が苦しそうに顔を歪めながら言う。
「構いません。私が消えることができるなら」
少女の強い光を宿した目が御子神を見る。
「強い人ですね」
御子神はやさしく少女の頭を撫でる。
少女はくすぐったそうに微笑み、頭を撫でる手を振り払わなかった。
「とりあえず、今日は家に帰ってくださいね。家族と過ごすのは、今日が最後ですから」
「明日、なんですね」

「はい。明日、あなたは消えます」
御子神が真剣に言う。
「わかりました。存分に家族に甘えてきます」
少女が満面の笑みを御子神に向ける。
「心残りがないようにね」
御子神も答えるように微笑んだ。
「そうだ。あの、これ・・・」
少女は自分の着ている羽織をつかんだ。
「あげるよ」
御子神は微笑みを崩さないまま、答える。
「ありがとうございます！」
少女が嬉しそうに笑う。
「さあ、お帰り」
御子神がやさしく、帰るように促す。
「はい！」
少女は満面の笑みで駆けていった。

名前

「さあ、お目覚めだよ」
御子神が目の前にある、薄緑色の液体の入った筒状の巨大な機械を見上げる。
その機械の中には黒髪の少女が浮いている。
御子神の言葉に反応して、少女が少しずつ目を開ける。
少女の瞳は瑠璃色に輝いている。
少女の意識が覚醒するにつれて、機械から液体が抜けていく。
そして、完全に液体が抜けると機械が開き、外に少女が出てくる。
出てきた少女を御子神がやさしく受けとめる。
「話せる？」
御子神が腕の中の少女に聞く。
「・・・はな、せます」
少女は咳き込みながら答える。
「よし」
御子神は少女を椅子に座らせる。
「体がちゃんと自分の意志で動くか確認してみて」
少女はうなずく。
そして、手、腕、肩、足・・・と動かしていく。
「ちゃんと動きます」
少女が力強く答える。
「良かった。成功したみたいだね」
御子神が微笑む。
少女は安堵したような表情を浮かべる。
「いつまでも、その濡れた着物じゃ風邪をひいてしまう。そっちに着替えがあるから着替えておいで」
御子神が指差した方向を少女は見て歩いていった。
少女は御子神から見えないところで、着替え始める。

御子神は使用した器具を片し、電源を切っていく。
「ところで、私の入ってた機械ってどうしたんですか？」
少女が遠くから聞いてくる。
「私が作ったんだよ」
御子神がするりと言う。
「えぇ！？」
少女が驚いた声を上げる。
「ふふふ。驚いた？　言っておくけど、嘘じゃないよ」
御子神が器具を片し終え、入り口近くの椅子に座る。
「・・・嘘でしょう？」
「本当だよ。人より遥かに生きてるんだ。それくらいの知識はある」
御子神が少し心外だというふうに声に険を持たせる。
「御子神さんってすごいんですね」
少女が着替え終えたのか、姿を現す。
「そうだよ」
御子神はうなずく。
「着物ってあまり着たことがないので、こんなのでいいんでしょうか」
おずおずと少女が尋ねてくる。
「うん。大丈夫。似合ってるよ」
御子神が柔らかく微笑む。
「良かった」
「さてと、落ち着いたところで色々説明するよ」
御子神が少女に椅子を勧める。
少女は御子神の座っていた椅子に座り、御子神は椅子を持ってきて少女の前に座った。
「最初に君のその体の説明ね」
「はい」
「その体は人形のようなものだから、壊れても修復できる。でも血は出るし、痛みも普通にあるから注意」

少女は真剣に聞いてうなずく。
「まあ、ほとんど普通の人間と変わらないよ。人並みに子を作ることもできるし、肉体的成長もできる。ただ、違うといえばさっきも言ったけど、腕がもげようが、頭が吹っ飛ぼうが治せる。だから、死ぬのは難しいかな。それこそ、魂を回収されないかぎりは」
少女は頭の中に御子神の言ったことを刻んでいく。
「何か質問は？」御子神は教師のように聞く。
少女は逆に生徒のように手を挙げる。
「私の名前はなんですか？　だって前の名前は使えないし」
「あ、忘れてた。君は何がいい？」
「急に振られても・・・。うーん・・・」
少女は考えるように眉間に皺を寄せる。
御子神も同じように考える。
「身体的特徴から言うなら、瑠璃とか」
少女の瞳を指差しながら御子神は言う。
「瑠璃？」
御子神は少女に鏡を渡す。
「ああ、なるほど。確かに瑠璃色ですね」
少女は納得したように頷き、鏡を御子神に返した。
「じゃあ、瑠璃でいいです」
「あっさりだね。本当にそれでいいのかい？」
「はい。名前にあまり頓着はしないですし」
「そうか。じゃあ、瑠璃ちゃん。今日からよろしく」
御子神が手を差し伸べ、握手を求めてきた。
「はい。よろしくお願いします。御子神さん」
伸ばされた手を掴んだ。
少女――――瑠璃は微笑んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3426y/

狐と死人の少女

2011年12月13日08時50分発行